

(5) 中西哲吉の死



中西哲吉は第一高等学校の後輩であり、マチネ・ポエティックの同人でもあった。高校生のときから文筆に優れ、周囲からはその文才を高く評価されていた。長谷川泉は「高校生離れした剛腕のライターが二人いた。一人は東村勝人、一人は中西哲吉である」と記す。山崎剛太郎は「論理的な頭脳をもち、真面目で、

反軍的な思想の持ち主だった」と述べた。加藤と同じように、詩を詠み、小説を書き、評論を著し、戯曲も書いた。その反軍的思想は大学当局から睨まれる存在であり、ときに筆名を使い、ときに他の学生の名前を騙って、学内紙誌に投稿した。掲載禁止処分を受けたことがあったが、中西はひるまなかつた。このような中西を加藤は高く評価した。(写真：左から山崎剛太郎、加藤、中西哲吉)

中西は学徒動員で戦地に赴くこととなる。大学生は幹部候補生として召集されるが、中西はそれを嫌い2等兵で応召した。その中西がフィリピンで戦病死したという報せが届いた。

中西は死んでしまった。太平洋のいくさの全体のなかで、私にどうしても承認できないことは、あれほど生きることを願っていた男が殺されたということである。(中略)みずから進んで死地に赴いたのでも、「だまされて」死を択んだのでさえもない。遂に彼をだますことのできなかった権力が、物理的な力で彼を死地に強制したのである。私は中西の死を知ったときに、しばらく茫然としていたが、我にかえると、悲しみではなくて、抑え難い怒りを感じた。太平洋戦争のすべてを許しても、中西の死を私が許すことはないだろうと思う。それはとりかえしのつかない罪であり、罪は償わなければならない。……(『羊の歌』「青春」)

加藤は戦争を語り、憲法第九条の護持についてのべるとき、しばしば「裏切りたくない」という。それは「中西の死」に対してである。「羊のようにおとなしい沈黙を守ろうと考えたときに、実にしばしば中西を思い出したのである」(同上)。加藤の憲法第九条を護るという姿勢は、親友を失ってしまった罪に対する償いなのであり、それゆえ決して揺るがないものなのだった。